



Title	音楽の欠片2 勝手な聴き手
Author(s)	河口, 篤
Citation	a+a 美学研究. 2018, 12, p. 156-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



音楽の欠片 2

勝手な聴き手

河口 篤

既に十分に知っていると思っていた作品に、新たな発見があった時の喜びというのは強烈なものだ。

その「発見」が、じっくり考えてみると、特に根拠のない、ひょっとしたら単なる思い込みかもしれないようなものだったとしても、なかなか捨て去ることが出来ないくらいに。

ある演奏会でシベリウスの第二交響曲を聴いていて、そういう経験をしたことがある。

終楽章のクライマックスで、トランペットが二度の上行でレからソに至った時、その認識が突然やってきた。

そうか、これがこの曲の答えだったのか。

第一楽章ではファ↓ソ↓ラ。終楽章ではレ↓ミ↑ファという、二度ずつ上がって三つ目までしか昇らない動きばかりであったのが、遂に最後の一山を越えて四つ目の音に至る。

これが答えであり、肯定なのだ。

この解釈が正しいと言えるのか、あるいは既に誰かが述べていたりしたか、といったことはどうでも良い。

そのくらいの勝手は、聴き手に認められるだろうか。